2　中世十三湊出土の陶磁器

陶磁器が主体とする食器には年代判定の基準だけでなく，生産流通史から消費の実体まで我々に示唆を与えてくれるものである。本稿では主に今回の十三湊遺跡調査によって出土した陶磁器のうち，中世のものについて分析を試みている。

中世十三湊遺跡は12世紀後半から15世紀中頃までの陶磁器が出土している。これら出土陶磁器による遺物量，及び陶磁器組成の変化から中世十三湊遺跡において大きな画期を想定することができた。

ここでは中世十三湊を中世前期（12世紀後半～14世紀初め）・中世後期（14世紀中頃～15世紀中頃）の大きく二段階として捉え，陶磁器からみた中世十三湊遺跡の様相をとらえてみたいと考える。なお，今回の調査で明らかとなった十三湊の遺構の変遷をふまえて言えば，それぞれ中世前期は十三湊Ⅰ期，中世後期は十三湊Ⅱ期とした段階に当たる。

(1)　中世前期の十三湊の様相

a　91年度分布調査

分布調査の成果によると，「12・13世紀代の遺物は白磁，珠洲甕片などが主に神明宮および北部の海岸沿いの土塁北側地区を中心に散布している」[千田ほか1993]。このことから，当時の港町は土塁北側地区に形成された小規模なものと考えられている。

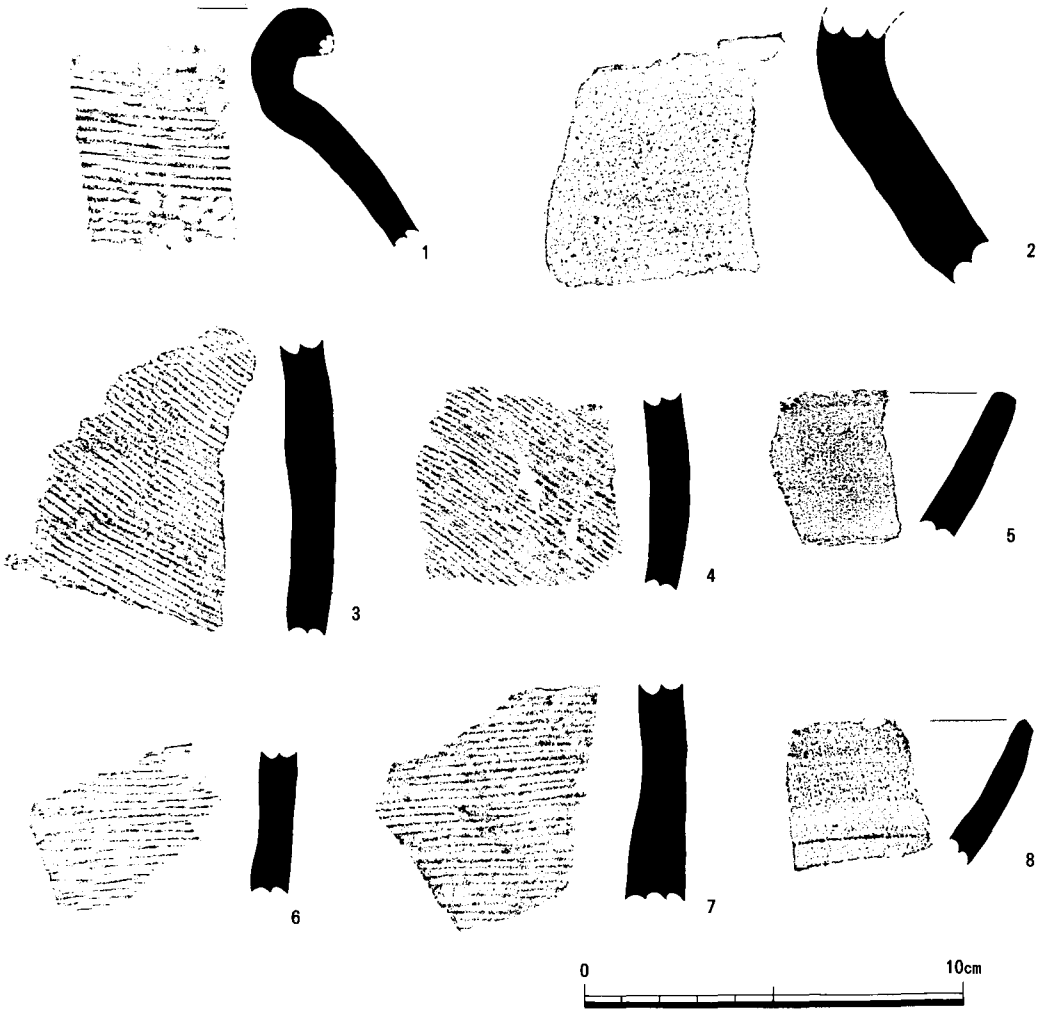
さらに今回，筆者は分布調査の遺物のうち，比較的破片からでも年代判定の可能な珠洲（系）陶器を取り上げて，詳細に分析を試みた。

それによると全体の珠洲（系）陶器は225破片を数え，十三集落（十三湊遺跡）全体に散布している。この中で明らかに中世前期に含まれる珠洲（系）陶器は８破片見られた。

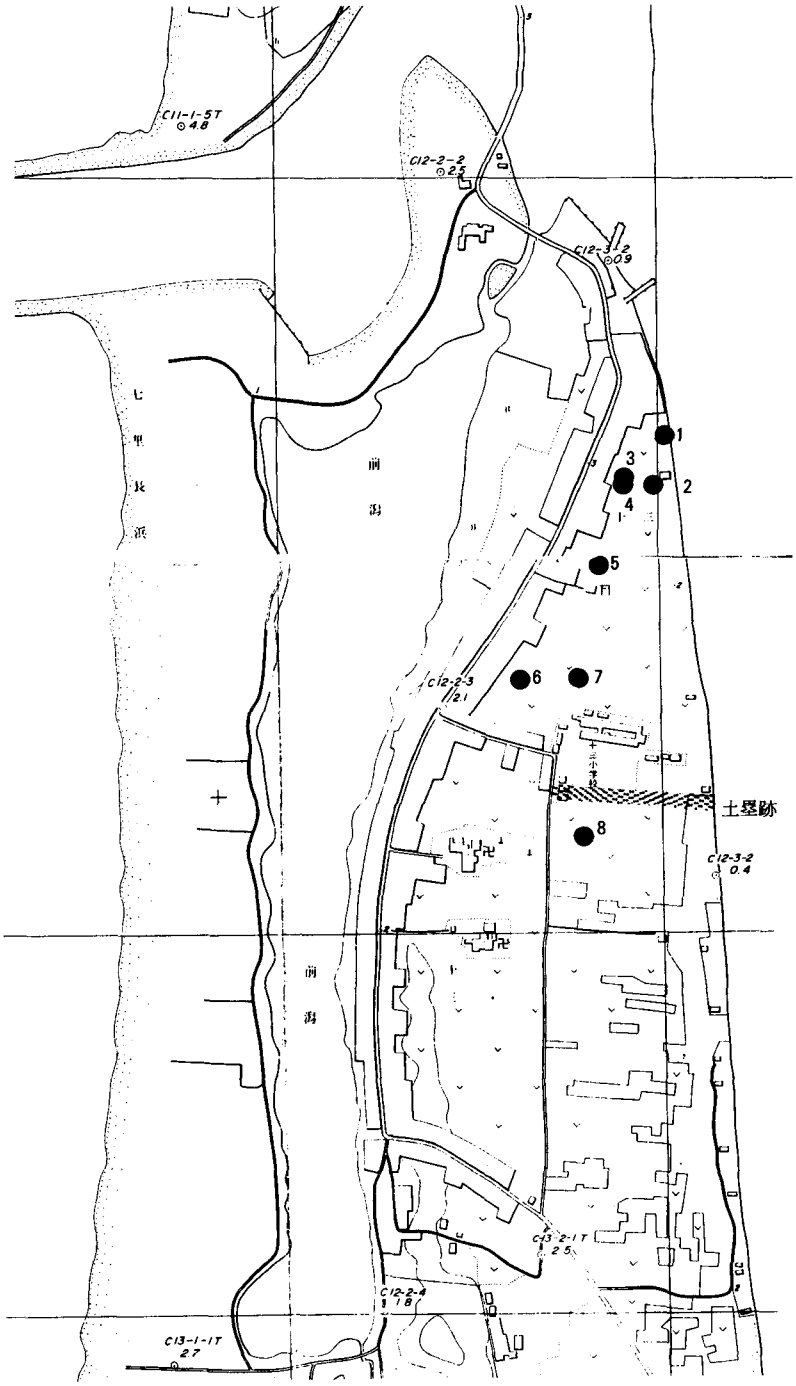
第56図をもとに遺物の概要を述べる。

1は壺甕類の口縁部破片である。珠洲窯初期の製品である「コの字形」をした口縁部が退化したものである。珠洲Ⅲ期（13世紀後半）に編年される。2は甕の口頸部片である。外面には平行叩打痕が見られない。口縁部は欠損しているが，「コの字形」に復元される。珠洲Ⅰ期（12世紀後半）の製品である。3・4・6・7は壺甕類の体部破片である。平行叩打痕の密度は3㎝当たり，3・6・7では15条，4は19条を数える。これらは珠洲Ⅰ期～Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半）に含まれるものである。5・8はすり鉢の口縁部破片である。それぞれ口縁部の器肉は薄く，内湾ぎみに立ち上がる。卸し目は見られない。5は端部が方形を呈するが，面取り調整はあまい。8はさらに薄くなった端部を外傾して面取り調整を行っている。それぞれ珠洲Ⅰ期に含まれる。

これら中世前期の珠洲（系）陶器の散布状況（第57図）を見ると，土塁南側地区に1点だけ見られるものの，他はすべて土塁北側地区に集中している。このことからも中世前期の十三湊遺跡の中心は，土塁北側地区にあると考えられる。



第56図　91年度十三湊遺跡分布調査採集の中世前期珠洲系陶器



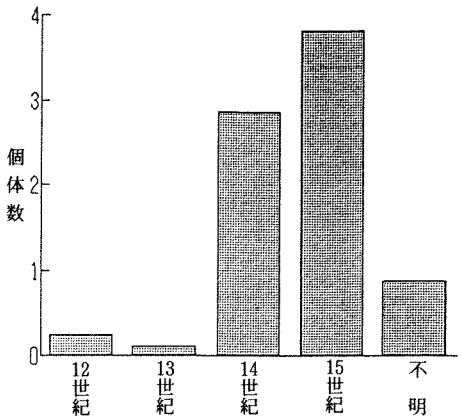
第57図　十三湊中世前期の珠洲系陶器の分布（91年度 分布調査分より）

b　92・93年度発掘調査

発掘調査により出土した中世前期の陶磁器は中世後期とした段階よりも遺物量が極めて少ないことが分かる（第58図）。しかし，中世前期の陶磁器はすべて土塁北側地区の調査（92年度第1

地区，93年度第1地区）で出土しており，91年度分布調査によって得られた成果を裏付ける結果となっている。

これら出土陶磁器の内訳を見ると，青磁鎬連弁文碗（図版83－144），中世土師器皿（かわらけ）（図版81－67，70など），珠洲（系）の甕（図版78－1），珠洲（系）のすり鉢（図版66，70）・瓷器系の甕（図版79－27）が挙げられる程度である。また，中世前期の陶磁器は多くが包含層から出土しており，遺構との関係は全く不明である。



第58図　十三湊遺跡出土中世遺物の時期別個体数

さらに個々の陶磁器の年代観をみてみると，中世前期の中でも特に中世土師器皿（かわらけ）は12世紀後半代に相当するロクロ製（在地系）のもので，中世十三湊遺跡の始まりを示す根拠となっている。また，青磁鎬連弁文碗は13世紀から14世紀初めに当たるものであろうか。珠洲（系）の甕，すり鉢は型式的に見ても，珠洲Ⅲ期末・Ⅳ期初頭段階（13世紀末・14世紀初頭）に相当する。瓷器系の甕は，口縁部の縁帯が受口を呈するタイプで，13世紀後半代に相当する。

c　十三湊遺跡ならびに周辺遺跡出土の中世前期の陶磁器（第59図）

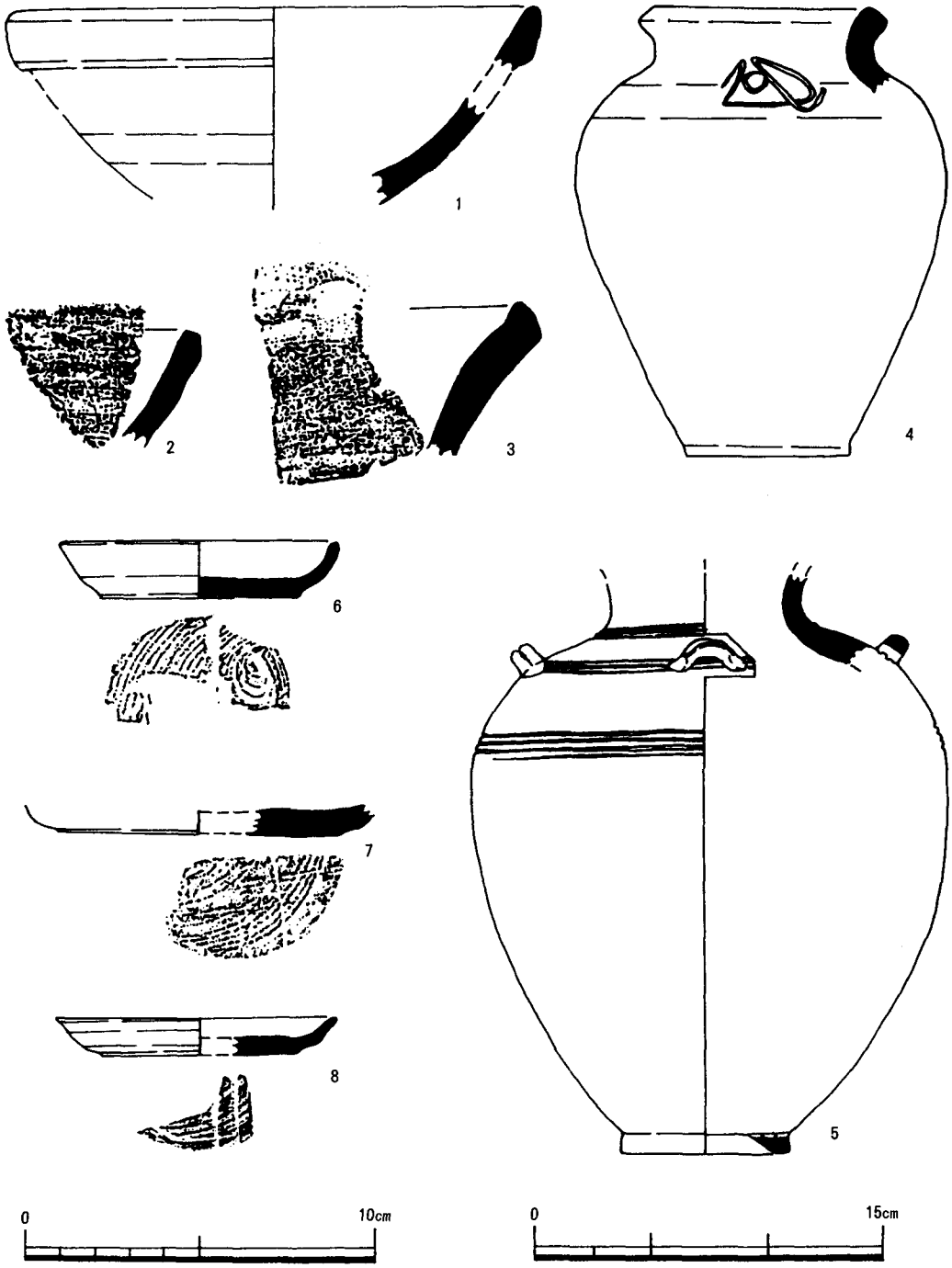
これまで3ケ年に及ぶ分布調査，発掘調査の成果から中世前期の陶磁器を見てきた。しかし，ほとんど十三湊中世前期陶磁器の様相を捉えることはできないため，これまで明らかとなっている十三湊に関連する遺跡群（ここでは十三湊遺跡が所在する青森県市浦村内の中世遺跡）から出土している中世前期の遺物を取り上げてみたい。

琴湖岳遺跡[1]

これまで十三湊で表採された陶磁器類を琴湖岳遺跡として紹介している半沢紀氏の研究がある［半沢　1991］。これによると，表採されている量だけでも千五百点余りにも達し，膨大な量の陶磁器類が十三湊に運ばれてきたことが伺える。陶磁器の表採場所は「現十三小学校を中心とする北側と南側に広がる畑地，及びその範囲の十三湖の汀線である。」としており，十三湊遺跡全体の範囲を示している。個々の遺物の表採地点は不明であるため，遺物の散布状況は明らかではない。しかし，この中にも中世前期の遺物が確認できる。舶載品では白磁玉縁状口縁碗（12世紀後半代），青白磁の梅瓶（13世紀代）がある。国産品では珠洲Ⅰ期（12世紀後半代）と思われるすり鉢が見られる。

相内遺跡

市浦村相内字赤坂69番地（相内集落の東方，オセドウ貝塚から北へ約100mの桂川と相内川が交わる地点の田地）からロクロ製壺が出土している。鈴木克彦氏によって資料紹介されたもので



第59図　十三湊遺跡ならびに周辺出土の中世前期の陶磁器

1：白磁玉縁椀（琴湖岳遺跡），2・3：珠洲（系）すり鉢（琴湖岳遺跡），4：珠洲（系）壺R種（相内遺跡），5：瓷器系四耳壺（山王坊遺跡），6～8：土師器皿（十三湊遺跡93年度調査）。縮尺は4・5が1／3，その他は1／2。

ある［鈴木　1976］。「壺の肩部に刻印文が施されている。火葬による蔵骨壺として使用された可能性が強い。」としたものの，「その様子は明らかではない。」としている。また，吉岡康暢氏によっても引用されており，「壺R種B類の珠洲産と見られ，珠洲I期（12世紀後半代）に編年されるものである。」としている［吉岡　1994］。

山王坊（さんのうぼう）遺跡

十三湊遺跡群として捉えることができるものに山王坊遺跡がある。十三湖の北岸，市浦村相内にある山林に囲まれた現在の日吉神社一帯である。かつて東北学院大学加藤孝教授を中心に発掘調査が行われている［市浦村教育委員会ほか　1987］。それによれば，神社建築と推定される大規模な礎石跡の遺構，金属製品，石造物，中世陶磁器類などの遺物が出土している。十三湊を支配したとされる安藤氏に関わる神仏習合の宗教遺跡と考えられている。

中世陶磁器は龍泉窯系青磁碗，越前，常滑，珠洲（すり鉢），瓦質土器（火鉢），瀬戸（おろし皿など）が出土している。出土陶磁器の年代は中世前期（12世紀後半か）まで遡る遺物に瓷器系四耳壺が1点ある他は，ほとんど14～15世紀前半に当てはまるものと推される。なお，瓷器系四耳壺の出土状況は述べられていないものの，壺内部には火葬骨片があることから，蔵骨器として利用されていたことが分かる。

また，白山・日吉神社は中世前期において日本海海運を支配したとされ，東北地方の日本海側でもかなりの分布が見られる。青森県においても南部地方に比べて，津軽地方に比較的多く存在している。

d　小　結

これまで今回の調査成果分，及び中世前期の陶磁器を出土した十三湊関連の遺跡を取り上げてきた。しかし，もともと中世前期の陶磁器の出土が極めて少ないために，中世前期十三湊の様相やその食器組成を論じる段階ではないが，これまで明らかとなったことの事実記載にとどめておきたい。

中世十三湊の成立は，出土陶磁器から12世紀後半代まで遡ることが明らかとなった。12世紀後半代の出土陶磁器は量的には少ないものの，中世土師器皿（かわらけ），白磁玉縁状口縁碗，珠洲（壺，甕，すり鉢），瓷器系四耳壺が確認できる。

また，91年度分布調査の成果から，中世前期の十三湊は土塁北側地区を中心とした小規模な施設であったと推される。さらに十三湖北岸地帯の相内遺跡，山王坊遺跡から点的に遺物が確認されている。

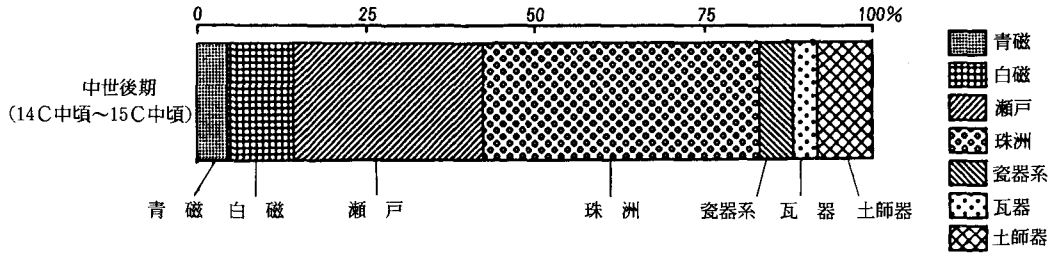
中世前期の陶磁器を食器組成の点から用途別に概観すると，食膳具に中世土師器皿（かわらけ），玉縁状口縁白磁碗，鎬連弁文青磁碗，青白磁の梅瓶が見られる。貯蔵具・調理具には珠洲（系）の壺，甕，すり鉢の基本三種で占められるが，瓷器系甕も若干量が見られる。さらに宗教具として瓷器系四耳壺（蔵骨器）が見られる。

(2) 中世後期の十三湊の様相

十三湊中世後期とした段階は，中世前期に比べ飛躍的に陶磁器の出土量が増加する14世紀後半から15世紀中頃（第３四半期）までを示している。そして，16世紀代の遺物は皆無となる。

遺物量の増加と遺構の変遷は密接に関わっている。ここで今回の発掘調査で明らかとなった遺構の変遷を概略してみると，14世紀末・15世紀初頭には十三湊遺跡の中央部に土塁が東西方向に渡って築かれ，土塁北側地区を守るように十三湊が南北に分断される。そして，15世紀代には土塁北側地区に港の中心施設，土塁南側地区には中軸街路に沿って町屋が広がる居住空間（階層差）の違いが生まれ，都市的様相を呈するようになる。このことを裏付けるように，遺物量も15世紀代のものが増加する傾向を示している。

中世後期の種類別陶磁器組成[2]（第60図）をみると，舶載品と国産品の割合は15％と85％を示



第60図　十三湊遺跡出土中世後期遺物の種類別組成比

第12表　十三湊遺跡出土中世陶磁器の器種構成表（1992～1993年度分）

器種＼種類	青磁	白磁	瀬戸 美濃	珠洲	瓷器系	瓦器	土師器
天目椀			0.2 (9)				
碗類（その他）	0.3 (13)	※ (8)	0.4 (18)				
皿類		0.8 (3)	1.0 (23)				0.9 (13)
盤類	0.1 (1)		0.3 (9)				
食膳具総計	0.4 (14)	0.8 (11)	1.9 (59)				0.9 (13)
すり鉢				1.8 (68)	※ (3)		
調理具総計				1.8 (68)	※ (3)		
壺（瓶子）			0.1 ( )	1.2 (50)	※ (4)		
壺（R種）				※ (1)			
甕				0.1 (35)	0.3 (42)		
貯蔵具総計			0.1 (13)	1.3 (86)	0.3 (46)		
食器　総計	0.4 (14)	0.8 (11)	2.0 (72)	3.1(154)	0.3 (49)		0.9 (13)
不明破片数	… (6)	… (2)	… (9)	… (7)	… (3)	… (3)	… (7)
その他　火鉢						0.3 (8)	
総　計	0.4 (20)	0.8 (13)	2.0 ( )	3.1(161)	0.3 (51)	0.3 (11)	0.9 (20)

（個体数算出は，口縁部計測法による。小数点第２位以下は四捨五入。括弧外は個体数，括弧内は破片件数である。※は存在するが，個体数の比率が数値として表れないもの。）

した。舶載品には青磁（高麗象嵌青磁も含む），白磁が見られる。国産品では瀬戸，珠洲，越前，常滑，瓦質土器，中世土師器皿（かわらけ）が見られる。これら多種多様な陶磁器の流通は日本海交易ルートが主要な役割を果たすようになったことを示しており，中世的食器組成が完結する段階と捉えることができる。

さらに，陶磁器組成の内訳を用途別に見てみると，

食膳具は中世前期から見られた青磁，白磁の他に瀬戸製品（瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期が中心）が加わる。器種的には，青磁は碗が主体を占め，中でも内外面無文で口縁部が外反するタイプ（上田分類のD類［上田　1982］）が圧倒的に多い。その逆に白磁は皿が主体を占めており，小型高台付丸皿（森田分類のD群［森田　1982］）が圧倒的に多い状況にある。

その他，今回の調査では青磁皿の出土は見られなかったものの，青磁盤は口縁端部が丸くおさまるタイプのものが1点（図版85－228）出土している。白磁碗では全体の形状は知り得ないものの，森田分類のC群（14世紀後半）とされる体部，底部破片が出土している。さらに高麗象嵌青磁碗も出土しており（図版83－151），朝鮮半島との直接の交易も想定される。

瀬戸製品には碗類（灰釉平碗，天目碗），皿類（縁釉小皿，おろし皿），盤類（折縁深皿，直縁大皿など）など器種が豊富にあり，中国製品を補完している。また，「かわらけ」も15世紀中葉に当たる京都系土師器皿（手づくね製品）が出土しており（図版84－167，168），京都系土師器の第2次広域伝播によって日本海経路で運ばれたものと推察される。

なお，瀬戸は窖窯期の製品ばかりで大窯期まで下る製品は1点も出土していない。さらに中国製染付も出土していないことから，中世十三湊の廃絶年代が16世紀まで下らないことは明らかである。

貯蔵具・調理具では珠洲（系）の壺・甕・すり鉢の基本三種が圧倒的に多く，陶磁器組成全体の約40％を珠洲製品が占めている。この他には瓷器系陶器の越前と常滑が若干量見られる。越前と常滑の製品はにわかに判別しがたいが，瓷器系とする大半は越前の壺甕類と考えられる。しかし，常滑製品と判断されるN字状口縁（14世紀後半代）の甕（図版78－5）も出土している。常滑製品の流通は，東日本太平洋側の海上経路も想定されるところでもある。

なお，珠洲製品は珠洲Ⅴ期（15世紀前半）の製品をピークにして，珠洲Ⅵ期（15世紀後半代）まで下ると見られる製品は殆ど出土しておらず，15世紀中葉に流通システムの大きな変化があったことは明らかである。

暖房具としては瓦質土器の火鉢が出土している。瓦質土器には胎土，焼成，色調などから奈良火鉢の搬入品と考えられる優品（図版78－8）の他に，胎土，焼成，色調も悪く，さらにスタンプ文様が退化した在地産とも考えられる二者が存在している。

以上のように陶磁器には日常生活で使用される用途の他にも宗教具，奢侈品としての用途が考えられるが，具体的に取り上げることは容易ではない。敢えて言うならば，宗教具に当たるものとしては瀬戸の花瓶が出土している。また，前述した「かわらけ」は宗教的儀式，或いは宴会な

ど非日常的なものとして使用される点からすると，宗教具として分類されるものであろう。奢侈品とされるものには，喫茶用具にあたる瀬戸の天目碗が出土している。また，前述した高麗象嵌青磁碗も付加価値の高い奢侈品と考えられる。そして，こうした宗教具，奢侈品はすべて土塁北側地区から出土している。

また，隠居地点，いわゆる伝檀林寺跡の過去の調査（昭和51年度）において青磁の香炉（器台），瀬戸の香炉，褐釉陶器が出土していること（第7章第4節C参照）からも，今後，こうした宗教具・奢侈品の出土地点が十三湊における「場の機能（階層差）」を表す指標となるであろうと推される［小野　1991］。

以上，十三湊中世後期の陶磁器を用途別に概観してみた。これらは今回の発掘調査によって出土した陶磁器のみの分析であるため，十三湊中世後期全体の陶磁器の様相が明らかとなったわけではない。今後，十分な発掘資料数の増加を待って再度検討していきたい(3)。　（榊原）

注

（1）「琴湖岳遺跡」は，平成6年6月20日付けをもって青森県遺跡台帳に「十三湊遺跡」として名称が変更されている。

（2）ここでは92，93年度の発掘調査によって出土した陶磁器を口縁部計測法による計量分析を行って，組成比をあらわした。

（3）常日頃，御教示と御指導を頂いている上ノ国町教育委員会の松崎水穂氏には非常にお世話になりました。また，国立歴史民俗博物館の小野正敏氏には，出土遺物の分類について御指導を賜りました。ここに本稿の作成に当たって深く感謝申し上げたい。

参考文献

千田嘉博・小島道裕・宇野隆夫・前川要　1993　「福島城・十三湊遺跡　1991年度調査概報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集。

半沢　紀　1991　「琴湖岳遺跡採集の陶磁器」『歴史と文化誌　津軽平野』第3号。

鈴木克彦　1976　「青森県出土の中世陶器2例」『考古風土記』創刊号。

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館。

市浦村教育委員会・山王坊跡調査団　1987　『青森県北津軽郡市浦村山王坊跡　昭和57年度～昭和62年度調査中間報告』。

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会。

森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会。

小野正敏　1991　「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社。